

国際結婚家庭出身者の成人後の日本語学習動機
——語りに基づく質的分析——

Motivations to (Re)Learn Japanese by Adults from International Families:
A Case Study

南波真知・田中順子, 神戸大学大学院
Machi Namba・Junko Tanaka, Graduate School of Kobe University

1. はじめに

近年、日本人の海外移住が増加し、それともななって複数言語環境下で育つ子どもの言語習得に対する関心が高まっている。とりわけ、移動による言語環境や学校環境の変化など、複数の要因が学齢期の子どもの日本語習得に影響を与えることが指摘されている（中島, 2016；近藤, 2019；川上, 2021 等参照）。川上（2021）は、複数言語環境下で育つ子どもが抱える問題について検討する際に、子どもたちが「言語間」、「空間」、「言語教育カテゴリー間」を横断する移動を経験しているため、「母語」、「外国語」、「継承語」などの既存の言語習得の区分では、彼らの複雑な言語状況を捉えきれないと指摘している（pp. 2-3）。また、脊尾（2018）は、言語習得の既存区分の定義の曖昧さや妥当性に疑義が示されている現状を指摘している。

これらの用語の定義の曖昧さが示唆するように、両親の母語が異なる国際結婚家庭出身の子どもが学齢期に国を越えて移動を経験した場合、彼らの母語や継承語間の関係性は一層複雑化する。例えば、日本のインターナショナルスクールで主として英語を使用し、家庭では日本語母語話者の親とは日本語、英語母語話者の親とは英語でやりとりをする子どもが、学齢期に長期の海外滞在を経て日本に帰国した場合、子どもの言語レパートリーの中での日本語の位相は、言語使用の時期、現地の主流語、家庭の言語方針、教育機関での使用言語等によって変動しうる。こうした複雑で変移する環境下で育った子どもはどのように日本語を学習し、日本語と関わるようになるのだろうか。

本研究の目的は、日米国際結婚家庭出身者が自身の学齢期の日本語学習経験を振り返ってどう評価し、成人後は日本語学習にどのような動機づけを持つのかを明らかにすることである。本研究では、学齢期に国を越えて移動を経験した日米国際結婚家庭出身者2名を対象に、5歳頃から20代の現在に至るまでの日本語学習状況の変容に着目し、日本語学習への取り組みや現在の日本語との関わりについて探るためのアンケートおよび半構造化インタビューを実施した。

なお、本研究では、近藤（2019, p.1）に基づき、最も習熟した言語を第一言語（以下、L1）、次に習熟度の高い言語を第二言語（以下、L2）と定義する。

2. 研究方法

2.1 研究参加者

本研究の参加者は、母親のL1が日本語、父親のL1が英語の日米国際結婚家庭に生まれ、自身のL1は英語、L2は日本語であるPC（25歳）とQC（22歳）の

成人男性2名である。参加者の背景を表1に示す。

表1 研究参加者の背景 (2025年4月現在)

参加者	出生地	居住地	年齢	L1が日本語	L1が英語
PC	日本	日本	25	母	父・弟
QC	香港	米国	22	母	父・妹

PCは日本生まれで、10歳の時に日本からシンガポールへ移住し、16歳の時に日本に帰国した。QCは香港生まれで、11歳の時に香港から日本へ移住し、13歳の時に米国へ移住した。

2.2 手続き

2025年3月末にGoogle Formsを用いて家族構成や言語使用状況に関するアンケートを実施し、同年4月に半構造化インタビューを行った。インタビューの主な質問項目は、(a) 学齢期の移動にともなう日本語学習環境の変化、(b) 日本語学習への取り組みと動機、(c) 現在の日本語との関わり、(d) 自分にとっての日本語の意味、であった。

インフォームドコンセントを得た上で、アンケートおよびインタビューを実施した。なお、PCとQCの兄弟姉妹は筆者の子どもが通っていた小学校に在籍していたことがあり、PCおよびQCの母親と筆者との間には事前に一定のラポートが形成されていた。ただし、母親2人の間には相互の面識はなかった。

PCにはZoomを用いた遠隔インタビューを日本語で実施し、録音・録画を行った。QCは彼の来日中に対面で英語によるインタビューを行い、音声のみを録音した。後日、PCとQCにはインタビューの書き起こしを提示し、内容確認をしてもらった。

2.3 分析方法

参加者が、学齢期の日本語学習経験から成人後の現在に至るまでどのように日本語と関わってきたか、その変容を捉えるために、Grounded Theory Approach (Corbin & Strauss, 2008/操・森岡訳, 2012) を分析手法に採用した。Grounded Theory Approachは、データに基づいて理論を生成し、現象の中に現れる変化や変化のプロセスに焦点を当てる質的研究手法であり、言語学習の過程と変容を捉えるのに適している。まず、参加者から得られたアンケートの回答、およびインタビューデータをNVivo (Ver.14) を使用して分析した。参加者のL2が日本語であることから、第二言語習得に関する動機づけ理論としてDörnyei (2005) のL2 Motivational Self Systemを理論的枠組みとして採用した。その主要構成要素であるL2理想自己 (ideal L2 self)、L2義務自己 (ought-to L2 self)、L2学習経験 (L2 learning experience) の三要素に着目して、質的分析を行った。参加者による日本語学習経験の振り返りを時系列で整理し、成人後の日本語学習動機を図式化して示した。

3. 結果

3.1 日本語学習経験の振り返り

本節では、参加者が自身の日本語学習経験を振り返った結果を示す。特に学齢期における学校環境および家庭環境と、それに関連する学習経験について、各自の語りから抽出した。

3.1.1 PCの日本語学習経験の振り返り

PCの日本語学習経験の振り返りの概要を表2に示す。

表2 PCの日本語学習経験の振り返り

年齢	居住地	学校環境	家庭環境	日本語学習経験の振り返り
5-10歳	日本/関西	インターナショナルスクール 英語の読書習慣	一親一言語の実践 日本語の読書習慣	「学校選択について両親が話し合いをしていた」
10-16歳	シンガポール	インターナショナルスクール 日本語話者がいない	日本語の通信教育の中断 日本語の読書習慣の中断 父による英語作文指導	「シンガポールに行ったことで開いた穴が結構大きかった」→第一言語が英語で定着
16-18歳	日本/関東	インターナショナルスクール 日本人学生多数 日本語の授業あり	日本語の読書習慣再開 母による日本語作文指導 (毎日600字)	「日本語インターフェースの増加で読むしかない」 「就職にもつながるし、書くしかない」
18-22歳	日本/関東	大学/日本語	自宅から通学	ICTツールの活用。 学術語彙を感覚的に理解
23-25歳	日本/関東	日本の会社に就職	自宅から通勤	日本語学習を振り返って 「読むことが第一」と語る

PCは5歳から10歳まで日本国内のインターナショナルスクールに在籍した。家庭では一親一言語の方針で、父親は英語を、母親は日本語をPCとのコミュニケーションに用いた。インターナショナルスクールで培われた英語での読書習慣は、英語だけでなく日本語にも波及した。

10歳から16歳の時期には、シンガポールのインターナショナルスクールに在籍し、日本語話者の不在や日本語の通信教育を中断したことにより日本語学習は停滞した。その一方で、父親による英語作文指導が行われ、英語が第一言語として定着した。

16歳から18歳の時期には、日本の国際学校に在籍し、家庭では母親の日本語作文指導を受けた。PCはこの時期について、「日本語インターフェースの増加で読むしかない」、「就職にもつながるし、書くしかない」と語り、日本語運用能力が日常生活や将来の目標のために不可欠であったとしている。

18歳から22歳の時期には、日本語で授業が行われる大学に在籍し、ICTツールの活用や日本語学術語彙の習得を通じて、高度な日本語表現に対応する能力を向上させた。大学卒業後は日本企業に就職している。日本語学習経験全般を振り返って「読むことが第一」に役立ったと述べている。

3.1.2 QCの日本語学習経験の振り返り

QCの日本語学習経験の振り返り概要を表3に示す。

表3 QCの日本語学習経験の振り返り

年齢	居住地	学校環境	家庭環境	日本語学習経験の振り返り
5-11歳	香港	インターナショナルスクール 補習授業校/ 日本語	家庭内言語は英語が優位	日本移住前に小学校への短期入学経験あり 日本移住前に補習授業校へ数か月通学
11-12歳	日本	公立小学校/ 日本語	学校の授業内容、塾や日本語のオンライン授業内容などを母親が英語に翻訳してサポート	「日本語を学びたいという気持ちが強かった。友だちと遊んだり、一緒にゲームをしたりしたいので」 「日本語のみの速い授業進度が自分にとっては強いストレスで、すごく厳しい組み合わせだった」 「日本語だけで行われる授業や塾や日本語のオンライン授業は、正直あまりモチベーションにはなりませんでした」
12-13歳	日本	私立中学校/ 日本語 日本語のみの授業 × 速い授業進度		
13-22歳	米国	米国の中学・高校・大学/英語	家庭内言語は英語が中心	日本での中学校体験が「日本語にトラウマ的な記憶を結びつけてしまった」と語る

QCは、5歳から11歳まで香港の国際学校に在籍し、家庭内では英語が優勢であった。日本へ移住する前に日本語補習授業校での学習や、日本の小学校への短期入学を経験している。

11歳から12歳の期間には、日本の公立小学校に在籍し、この間は母親が学校や学習塾での授業内容を英語に翻訳してQCの学習を支援した。QCは“*I definitely wanted to learn the language. You want to hang out, play games, and have fun.*”（「日本語を学びたい気持ちが強かった。友だちと遊んだり、一緒にゲームをしたりしたいので」）と語り、当時は日本語学習に対して内発的動機があったと推測される。

12歳から13歳にかけて在籍した私立中学校時代は、日本語のみで行われる進度の速い授業についていけず、学習意欲が低下した。“*The online lessons and cram schools that were entirely in Japanese didn't really encourage me to learn, though.*”（「日本語だけで行われる授業や塾やオンライン授業は、正直あまりモチベーションにはなりませんでした」）と語っている。

13歳以降は米国に居住し、英語環境下で中学、高校、大学生活を送った。QCは、日本の中学校での経験について“*Due to the stress of that situation, I ended up associating those traumatic memories with the Japanese language.*”（「当時はストレスを受けていたので、トラウマ的な記憶を日本語に関連づけることになった」）

と語り、この時期の経験が日本語に対する心理的抵抗感の一因となったことが示されている。

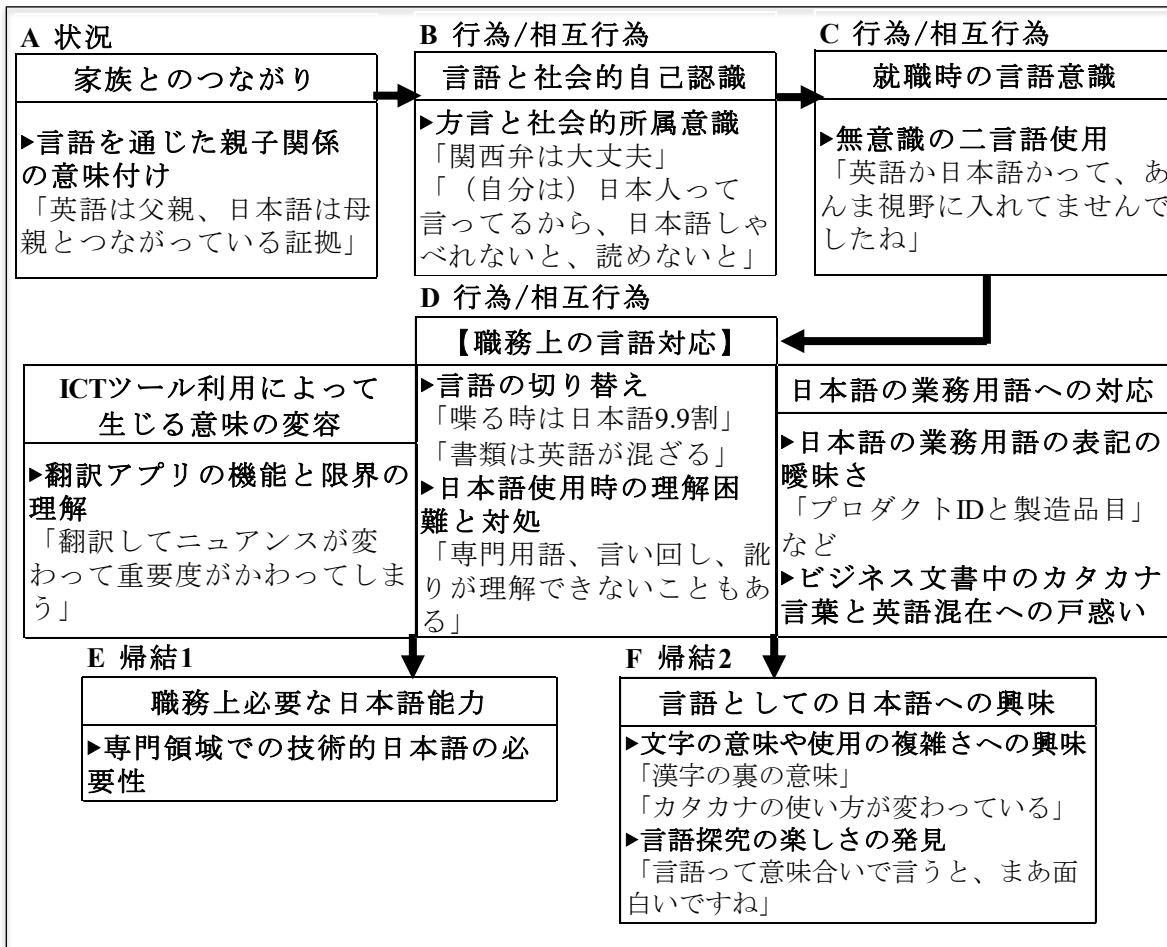
3.2 参加者の成人後の日本語学習動機

前節では、参加者の家庭環境や学校環境と、それらに関連する日本語学習経験を時系列で整理して提示した。本節では、参加者の成人後の日本語学習動機について質的に分析し、図式化した結果に基づいてストーリーラインを作成して記述する。Aの“状況”から始まり、B/C/Dの“行為/相互行為”を経てE/Fの“帰結”へと展開する。なお、<>はカテゴリー、[]はラベル名、【 】は現象の中心となるカテゴリー、「」は参加者の実際の語り（原文ママ）を示す。

3.2.1 PCのストーリーライン

まず、PCの成人後の日本語学習動機について図1に示す。

図1 PCの成人後の日本語学習動機



Aの“状況”では、PCにとって「英語は父親、日本語は母親」が<家族とのつながり>を象徴し、[言語を通じた親子関係の意味付け]になっている。

次にBの“行為/相互行為”では、関西弁の使用に対する自信と親しみ、そし

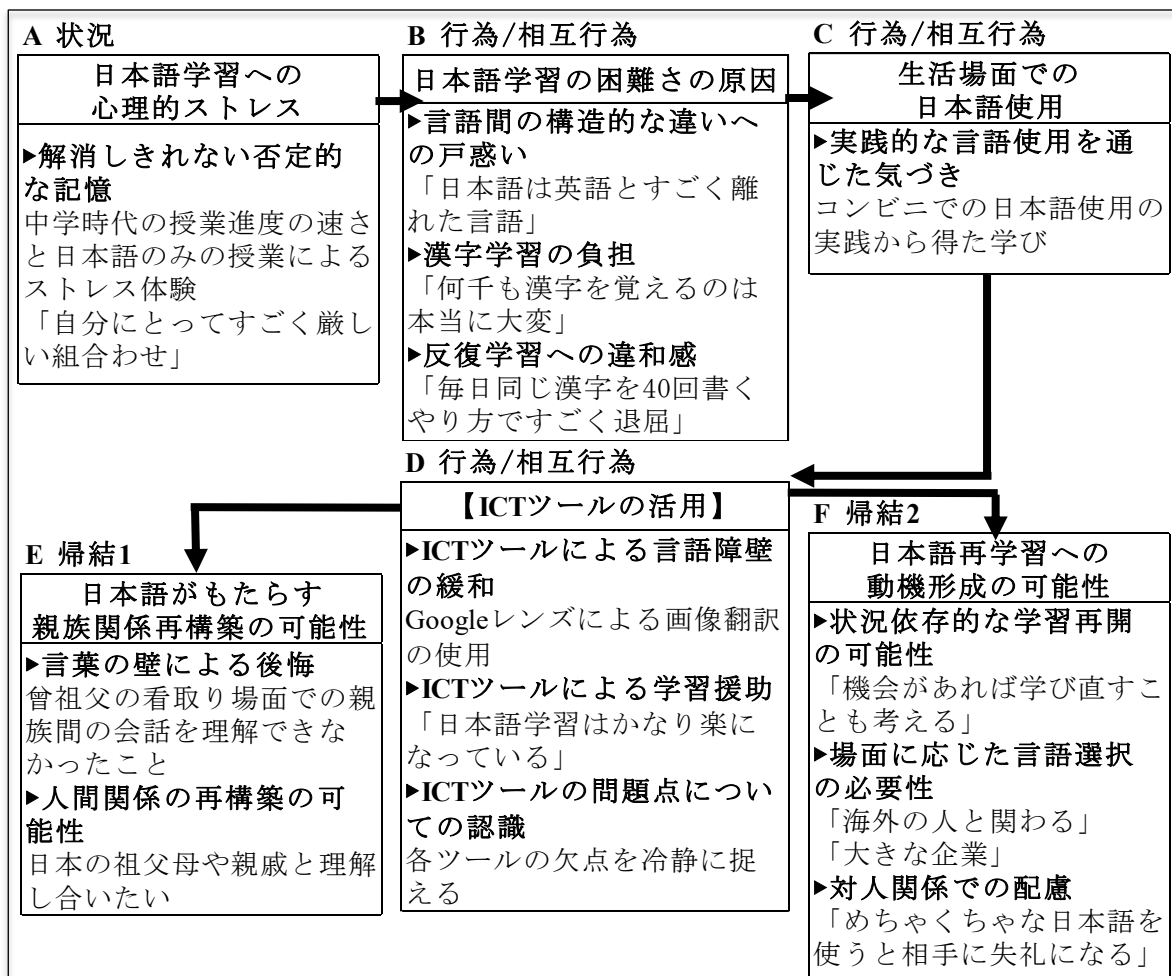
て自分は「日本人」であるという意識が<居住地における社会的自己像>の形成につながっている。さらに、Cの“行為/相互行為”では、「英語か日本語かって、あんま視野にいれてませんでしたね」といった語りから、<就職時の言語意識>として「無意識の二言語使用」が見られ、言語能力の活用よりも就職活動そのものへの対応に関心が向けられていた。就職後のDの“行為/相互行為”では、[日本語の業務用語の表記の曖昧さ]や[ビジネス文書中のカタカナ言葉と英語混在への戸惑い]があり、また<ICTツール利用によって生じる意味の変容>に直面しつつも、英語と日本語の[言語の切り替え]を行い【職務上の言語的対応】を行っている。

このような経過を経て、Eの“帰結1”の<職務上必要な日本語能力>に対応するため、[専門領域での技術的日本語の必要性]から生じた道具的な動機づけが見られる。また、Fの“帰結2”の<言語としての日本語への興味>が高まり、[文字の意味や使用の複雑さへの興味]や[言語探究の楽しさの発見]を通じて、内発的動機づけが新たに生じた。

3.2.2 QCのストーリーライン

続いて、QCの成人後の日本語学習動機を図2に示す。

図2 QCの成人後の日本語学習動機



QC は、中学時代に端を発する〈日本語学習への心理的ストレス〉を抱えていた。A の“状況”では[解消しきれない否定的な記憶]として、日本語のみの授業や速い授業進度への強いストレスが語られている。その後、B の“行為/相互行為”では、英語と日本語の[言語間の構造的な違いへの戸惑い]、[漢字学習の負担]、[反復学習への違和感]から〈日本語学習の困難さの認識〉が生じた。

しかし、C の“行為/相互行為”では、[実践的な言語使用への気づき]が生じ、〈生活場面での日本語使用〉への関心がうかがえた。さらに、D の“行為/相互行為”においては、QC の関心が【ICT ツールの活用】へと広がり、[ICT ツールによる言語障壁の緩和]や[ICTによる学習援助]にまで考察が及ぶ一方で、[ICT ツールの問題点についての認識]も示された。

その結果、E の“帰結 1”では、〈日本語がもたらす親族関係再構築の可能性〉が生まれ、[言葉の壁による後悔]や[人間関係の再構築の可能性]が示された。また、F の“帰結 2”では、〈日本語再学習への動機形成の可能性〉が示され、[受身的条件での学習再開の可能性]や、[場面に応じた言語選択の必要性]、[対人関係での配慮]が意識されている。このように、QC の成人後の日本語学習動機は、日本語学習についての否定的経験を抱えながらも、ICT ツールの活用や人間関係の再構築、キャリア形成期に必須である対人対応場面の経験など、複数の要因が相互に関係しながら再構築されていった。

3.3 成人後の日本語学習動機の特徴

前節では、参加者 PC および QC の成人後の日本語学習動機のストーリーラインを示した。本節では、それらを L2 Motivational Self System (Dörnyei, 2005) の下位三要素に基づいて分類し、得られた特徴を表 4 に整理する。

表 4 L2 Motivational Self System に基づいて分類した成人後の日本語学習動機の特徴

	PC	QC
L2 理想自己 (ideal L2 self)	<ul style="list-style-type: none"> ・母語を介して親とつながっているという自己像 ・自分が属する社会への帰属意識 	<ul style="list-style-type: none"> ・親族との理解を深められるような関係性の再構築願望 ・環境が整えば日本語を学び直したいという理想像
L2 義務自己 (ought-to L2 self)	<ul style="list-style-type: none"> ・社会で期待される日本語の使用 ・職務上、必要な専門用語の表現についての配慮 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手への礼儀、誤解回避に関する知識
L2 学習経験 (L2 learning experience)	<ul style="list-style-type: none"> ・職場でのカタカナ用語の用法についての疑問 ・日本語の文字の多様性 ・翻訳アプリで生じるニュアンスのずれへの関心 	<ul style="list-style-type: none"> ・否定的な記憶の再解釈 ・日本語学習の困難要因の自覚 ・ICT ツールによる学習負担の軽減

Dörnyei (2005) によると、L2 Motivational Self System の構成要素の一つである L2 理想自己 (ideal L2 self) は、L2 を用いて将来どのような自分になりたいか

という理想の自己像を指す。二つ目の L2 義務自己 (ought-to L2 self) は、他者から期待される自己像や、そうでなければならぬという自己像を指す。そして三つ目の、L2 学習経験 (L2 learning experience) は、学習環境や経験に基づく状況的動機づけを指す (p.105)。

L2 理想自己については、PC の場合、母語を通じて親とつながっている自己像や、自分が属する社会への帰属意識が強く、日本語でのコミュニケーションを実践する自己像を理想としている様子が見られた。一方、QC の場合、親族との関係を再構築する自己像や、機会があれば日本語を学び直すという自己像が理想としてあり、親戚関係や日本語学習との再接続への欲求が日本語学習の動機の中心にあることが示された。

次に、L2 義務自己については、PC の場合、社会的役割の遂行や職務上必要とされる日本語の業務用語を正しく使用すべきであるという義務自己の形成が見受けられた。一方、QC の場合は、日本語を使用する際の礼儀や誤解回避といった日本社会の慣習に基づく語用論的な配慮への義務感が示されていた。

最後の L2 学習経験については、PC は職場でのカタカナ言葉や日本語の文字表記の多様性、さらに翻訳アプリ利用時に生じるニュアンスのずれに気づいた経験を通して、日本語への関心を深める傾向が見られた。一方、QC は、困難を伴った過去の日本語学習経験を再解釈しつつ、ICT ツールを活用することで、日本語の学習環境を再構築する可能性を模索している姿勢が見られた。

4. 考察

前節では、参加者の学齢期からの学習経験と成人後の日本語学習動機の特徴を整理した。本節では、これらの結果を基に、国際結婚家庭出身者は成人後にどのような日本語学習動機を持っているのかという研究課題について考察を行う。

PC の語りからは、社会的帰属意識や、言語を介しての親子関係の意味づけが、L2 理想自己の形成を支えていることが明らかになった。また、職務上で専門用語への対応が求められることから、L2 義務自己に起因する動機も確認された。さらに、英語が L1 である一方で、L2 である日本語を使用する社会への適応意識の強さが示され、日本語に対する肯定的な姿勢がうかがえる。加えて日本語を L2 として学んできた経験により、文字体系の多様性や翻訳上のニュアンスの違いを客観的に捉えられるようになり、これが日本語そのものへの関心や探求心といった内発的動機づけにつながっていた。これらを総合すると、PC における日本語学習動機は、L2 としての学習経験を基盤として、L2 義務自己と L2 理想自己が相互補完的に学習動機の形成に作用し、職務経験と個人的興味の両面から日本語学習動機を支えていることが示唆された。

一方、QC の語りからは、学齢期に形成された否定的な L2 日本語の学習経験が、成人後も心理的障壁として影響を与えていたことが確認された。しかし、ICT ツールの活用を通じて、その否定的経験は部分的に肯定的な方向に再評価されつつあった。また、親戚との関係再構築に対する意識や、日本語を使用する可能性のある職に就くことを見据えた上での日本語再学習の可能性、日本社会における礼儀や誤解回避といった対人的配慮は、L2 義務自己に根ざした日本語学習

動機に結びついていることが示唆された。これらを踏まえると、QC については、否定的経験の克服と日本社会の慣習に基づく言語使用の義務感を背景に、将来的な日本語使用の必要性を見据えた上で L2 理想自己が形成されつつある。

以上のことから、本研究の参加者である PC と QC の場合、学齢期の日本語学習経験は必ずしも現在の日本語学習動機を決定づけるものではないと考えられる。むしろ、日本語学習の動機は、成人後の生活環境や、技術的な学習支援を通じて再構築される可能性があると言えよう。この 2 名の日本語学習動機は、L2 理想自己、L2 義務自己、そして過去と現在の学習経験といった複数の要因が関連している。つまり、日本語学習の動機は、家庭、学校、社会といった多様な環境要因の影響を受けながら、成人後も動的に形成、再構築されることが明らかとなった。

5. 結論

本研究の目的は、学齢期に国を越える移動を経験した日米国際結婚家庭出身の成人 2 名を対象に、学齢期以降の日本語学習経験と成人後の日本語学習動機との関連性を明らかにすることであった。インタビューに応じて語られた内容を質的に分析し、日本語学習動機の形成と再構築のプロセスを可視化した。

その結果、国を越えた移動によって日本語との接触が一時的に希薄化した場合でも、家族との関係や将来的な職業での必要性を見通して、日本語学習への関心が再び強まる可能性があることが示された。このことから、国際結婚家庭における言語教育は、長期的な視点に立って継続的に支援をする必要性があることを示している。

しかし、本研究の考察結果の解釈には注意が必要である。本研究は博士論文研究のパイロット調査として 2 名という数少ない参加者について実施したものであり、事例研究の域を出ていない。したがって、今後の研究においては参加者数を増やす必要がある。あわせて、子どもだけでなく保護者へのインタビューも実施して、子どもと親双方の視点を取り入れた分析を行う必要がある。加えて、データ分析にあたっては解釈の恣意性を減らす方策を加える必要がある。そのような点に留意して、国際結婚家庭出身者の成人後の日本語学習動機形成についてさらに理解を深めていきたい。

参考文献

- 川上郁雄 (2021) 『「移動する子ども」学』くろしお出版
- 近藤ブラウン妃美 (2019) 「序章 親と子をつなぐ継承語教育」近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美 (編) 『親と子をつなぐ継承語教育——日本・外国にルーツを持つ子ども——』1-12 くろしお出版
- 脊尾泰子 (2018) 「成人初級『継承語学習者』の自己評価と位置づけ——カナダの大学の初級日本語コースで学ぶ学習者の事例から——」『2018 CAJLE Annual Conference Proceedings』227-234
- 中島和子 (2016) 『完全改訂版 バイリンガル教育の方法』アルク
- Corbin, J. & Strauss, A. (2008). *Basics of qualitative research: Techniques and*

- procedures for developing grounded theory* (3rd ed.). SAGE. (コービン, J. & ストラウス, A. 操華子・森岡崇 (訳) (2012) 『質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順—』第3版 医学書院
- Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.